



農業保險論

第貳篇 第三篇

下

1006
3



114
A3623
3

要
二
三

第二篇

第一章

貯金預所土地抵當貸付會社及保
險會社ヲ結合シテ一ノ機關ヲ構成スル事

第十四條

實ニ左ノ三件ノ設アルヲ必要トスルモノ



ナリ即チ

第一貯金預所

第二保險會社

第三土地抵當貸付會社

土地抵當貸付會社ハ之ヲ内ニシテハ貸付資金ノ
充備ヲ要シ之ヲ外ニシテハ貸付金ノ安全ナルヲ
要スルモノナリ而シテ其要スル所ノ資金ハ若干

大正十一年四月
隈侯爵邸寄贈

ハ定額ニ至ルマテハ農民ノ貯金ヲ以テ之ヲ聚集
スルヲ得ヘク又貸付金ハ農業保險ニ依リテ之ヲ
安全ニスルヲ得ヘシ
若シ農民ノ貯金ヲシテ之ヲ其地方外ニ流出セス
更ニ農業上ノ利用ニ供セシメントスルニハ則チ
地方ニ金融社ヲ設ケ貯金ヲ貸付クルノ媒介ヲ爲
サシメサル可カラス其貸付方ハ之ヲ二様ニシ一
ハ償還期限ヲ短クシ一ハ之ヲ長クセシムヘシ其
期限ノ長キモノハ貸付金ヲ安全ナラシムル爲メ
農業保險法ニ依ルヲ必要トス而シテ其保險法ハ
單ニ損害ヲ多數人ニ分擔セシムルノ主義ノミニ
據ラズシテ兼ホテ損害ヲ數年ニ分割スル第二主

義ニ據ラサルヘカラス又巨額ノ資金ヲ集メ其一
部ハ抵當ヲ以テ之ヲ貸付クルコトヲ要スヘシ又
被保險者へ賠償金ヲ交付シ被保險者ヨリ保險料
ヲ受收スルニハ地方金融社ヲ利用シ會社ト被保
險者トノ中間ニ居テ其受授ノ事務ヲ處辨セシム
ヘシ且農業ニ通曉スル監定人ヲ置カサルヘカ
ス要スルニ農民貯金法土地抵當貸付法及農業保
險法ハ互ニ相維持シテ利用ヲ相成スモノナレハ
此三事業ヲ結合シテ一個ノ機關ヲ構成スルコト
ハ最モ此事業ニ望ム所ナリ

第四十六條

然レテ貯金兼土地抵當貸付會社ハ農業保險上

ニ生スル危害ヲ受ク可ラサルナリ又保險會社ハ
既ニ前文ニ述ヘタルカ如ク其區域ノ愈々廣大ナル
ニ隨ヒテ愈々其完美ヲ見ルニ至ルヘキカ故ニ日本
全國ニ一箇ノ會社ヲ設立スルヲ要スヘシ
今若シ農業上地方ノ貯金兼土地抵當貸付會社ヲ
設置シ農業保險會社トハ各其經費ヲ異ニスルモ
其役員ヲ一ニシ以テ共ニ其經費ヲ節減セント欲
セハ則チ左ノ二件ヲ施設スルヲ要ス
農業保險會社ハ日本全國ニ一箇ヲ設ケ貯金兼
土地抵當貸付會社ハ之ヲ各府縣ニ開設スル
各府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲシテ農業保
險會社ノ代理店トシ其府縣内農業保險會社ノ

事務ヲ扱ハシメ以テ兩會社ヲ連結セシムルヲ

第四十七條

又土地抵當貸付會社ヲシテ保險事務ヲ兼ネシム
ルトキハ保險會社ヲシテ更ニ特別ノ便利ヲ得セ
シムルモノナリ蓋シ府縣貯金兼土地抵當貸付會
社ノ社則ニ於テ凡ソ保險ヲ受ケサル農民ニハ決
シテ貸付ヲ爲サルノ法ヲ設定セサルヘカラス
夫レ保險ノ法ハ日本ニ在リテハ一新法タルカ故
ニ其保險ヲ望ムヘキ者モ猶ホ頗ル之ヲ疑惑シテ
大ニ思慮ヲ煩ハスヘシ今若シ此ノ如キ土地抵當
貸付會社等ヲ設ケスシテ單ニ農業保險會社ノミ
ヲ設ケハ各府縣ノ農民ニ於テ各自進ミテ其保險

ヲ請フヘキヤ否ヤ今ニ於テ之ヲ明言シ易カラサ
ル者アリ若シ果シテ農民各自進ミテ保險ヲ請ハ
ス而シテ府縣郡區ニ無用ノ保險委員ヲ置クトキ
ハ徒ラニ莫大ノ費用ヲ要ス可シ故ニ政府若シ法
律ヲ以テ農業保險會社ヲ設立セハ必ス保險ヲ受
クルヲ以テ各農民ノ義務トナスヲ望ムナラン余
ハ嘗ニ此強制保險法ヲ厭忌セサルノミナラズ却
テ強制家屋保險法ヲ施行スル國(巴丁國及瑞西國
ノ如シ)ニ於テ之ヲ見ルカ如ク之ヲ一國ノ幸福ト
謂ハント欲スルモノナリ且ツ強制保險ノ主義ハ
輒近益賛成者ヲ得獨逸國ニ於テハ強制災害保險
會社ノ設アルニ至レリ然リト雖モ余ハ深ク實際

ノ利害ヲ顧ミ敢テ始ヨリ強制保險法ヲ行フヲ希
望セサルナリ何トナレハ強制保險法ヲ行フトキ
ハ保險會社ニ加入スル者一時ニ多數ヲ致シ會社
ノ組織上ニ於テ爲ニ大ニ困難ヲ起スヲ免レサレ
ハナリ夫レ強制保險法既ニ行フ可ラス而シテ農
民ヲシテ各自ニ進ミテ保險ヲ請ハシメントスル
ニハ宜シク何等ノ方法ヲ用ウヘキヤ乃チ前文ニ
述フル所ノ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ニ於テ
保險ヲ受ケサル農民ニハ決シテ貸付ヲ爲サ、ル
ノ規定ヲ設クル是レノミ則チ今日日本農民ハ土
地抵當貸付ヲ要スルヲ急ナルヲ以テ其保險會社
ニ加入スルモノ、數ハ設立ノ初年ニ於テ早ク已

非數千ヲ以テ數フルニ至ラシハ觀易キノ勢ナリ
而シテ此數千ノ加入者ハ諸府縣ニ散在シテ各々
其生計ヲ營ムモノナリ此輩ノ是ノ如ク大區域内
ニ散在スルハ保險會社ノ爲メニ甚タ便宜ヲ與フ
ルモノト謂フヘシ何トナレハ一旦天災ニ遭逢ス
ルアルモ其災ニ罹ルモノハ唯被保險者ノ一部
ニ止マルハキヲ以テナリ

第四十八條

世或ハ問フモノアリ曰ク今此會社ノ久シカラス
シテ諸府縣ニ設立アルヘシト豫期スルモノハ將
タ何ノ見ル所アリテ然ルヤト之ニ答ヘテ曰ハク
現今諸地方ニ於テ此會社ノ必要ナルハ蔽フヘカ

ラサルノ事實ナリト然レトモ此言ノミヲ以テ未
タ其辯解トナスニ足ラス何ントナレハ此需用タ
ル今日ニ始マルニ非スシテ而シテ今日ニ至ルマ
テ曾テ之ヲ充タシタルコトナケレハナリ
余ハ今將ニ此會社ノ設置構成及經理ニ係ル簡明
ナル方案ヲ起草シ併セテ處務ノ方法及之ニ要ス
ル用紙帳簿ノ事ヲ細述シ並ニ事務表事務取扱順
序及役員心得等ヲ開陳セントス若シ此方案等ニ
由リテ各府縣ヲシテ容易ニ會社設立ノ計畫ヲナ
スヲ得セシメハ將ニ競フテ其設立ヲ謀ラントス
則チ四十箇所ノ會社ノ設立ヲ見ルハ益シ遠キニ
非ズヤ必セリ

此府縣貯金兼土地抵當貸付會社ハ一ニハ驛遞貯
金預所ト同シク小民ノ貯金ヲ安全ニシ一ニハ利
子低廉ノ貸付金ヲナシ以テ農業困弊ノ時ニ際シ
農民ヲシテ高利負債ノ爲ニ資産ヲ擯取セラル
ノ弊ヲ免レシムルヲ得ヘシ故ニ之ヲ以テ各地方
ノ共同會社トシ會社自ラ其經理ヲナスモノトシ
且ツ其府縣ヲシテ之ヲ監督保證セシムルヲ要ス
是ノ如キ範圍ヲ以テ自治ノ會社ヲ設立スルハ獨
リ其地方人民ニ於テ幸福ヲ得ルノミナラス又其
府縣會ニ於テモ亦之ヲ設立スルノ必要アル者ト
ス
府縣會ヲシテ之ヲ設立スルノ必要アラシムル所

以ハ政府ヨリ左ノ二法ヲ設クルニ在リ

第一 町村ニ驛遞町村貯金預所ヲ開設シ府縣會

ニ於テ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲ開
設シタルトキハ右貯金預所ノ貯金ヲ該會
社ニ差入レ貸付ノ用ニ供スルコト

第二 府縣貯金兼土地抵當貸付會社ノ開設ニ繼

キテ府縣銀行ヲ設立シ道路提防ノ修築港
灣ノ修理河川ノ治水其他諸般ノ工事等ニ
由リ地方公共ノ爲ニ資金ヲ要スルコトア
レハ其貯金兼土地抵當貸付會社アル府縣
ニ限リ該銀行ヨリ資金ヲ借用スルノ權利
大ニ有スヘキ規則ヲ立ツルコト(府縣銀行ノ

事ハ地方財政組織ニ關スル建議ニ於テ之ヲ論ス此建議ハ本論ニ於テ之ヲ省ク第十ニ條ヲ見ルヘシ

第二章 農業保險ノ事

第四十九條

第一篇ニ述ヘシカ如ク農業上ノ保險ハ保險セラ
ルヘキ諸般ノ物件ト諸般ノ災害トニ在リ而シテ
其災害中ニハ一時ニ諸般ノ物件ヲ損害スルモノ
少ナカラス
例ヘハ洪水ノ如キ其一ナリ野ニ在ルノ穀類ハ固
ヨリ其既ニ收藏セル穀類ヲモ蕩盡シ家畜ヲ溺死
シ家屋ヲ漂没シ現ニ穀類アル田畑モ砂礫ヲ以テ

填充セラレ又ハ其流勢ノ爲ニ土地ヲ壞類セラ
ルノ患アリ

茲ニ保險スヘキ主要ノ物件四類アリ左ノ如シ

第一 現ニ果穀アル土地並ニ之ニ附屬スル疏
水具及除水器具垣牆及階梯果樹葡萄樹
等

備考此部類ニハ農具ヲモ算入スルヲ
得ヘシ何トナレハ農具ハ田畑等ノ廣
表性質ノ割合ニ隨テ備フルモノナレ
ハナリ

第二 田畑果樹葡萄樹等ニ在ル成熟前後ノ諸
種ノ果穀及作物並ニ稻塚等ニ在ル穀物

山林

及家屋ニ收藏シタル穀類

第三 家畜

第四 家屋

此四類ノ内孰レヲ保險シ孰レヲ保險セサラント
 スルヤ今之ヲ講究スルニ我獨逸國ニ於テハ家畜
 保險ハ鷄、鶩、鳩、家兔等ヲ加ヘサルヲ常トス又豚、羊、
 山羊、驢、騾ヲモ除却シテ唯牛馬ノミヲ保險スルモ
 ノアリ牛馬ハ從來日本ニ於テ經濟上重要ナル無
 比ノ畜類トス故ニ先ツ牛馬ニ限リ保險スヘシ然
 レトモ尚ホ其年齒又ハ使役方ノ如何ニ依リテ之
 ヲ保險セサルヲ例トス

(備考)例ハ、ハブウウンシユロイヒ國普通家畜保

險會社ニ於テハ此畜類ヲ保險スルニ概シテ除
 斥スルモノ數種アリ即チ(甲)一歳以下ノ駒及十
 二歳以上ノ馬(乙)三ヶ月以下ノ犢十二歳以上ノ
 牛(丙)郵便用借馬用乗合馬車用打禾用獵狩用競
 馬用及軍用ノ馬是ナリ

又家屋ニ屬スルモノモ舉ケテ農業上ノ保險ニ付
 スヘキニ非ラス例ヘハ農家ニシテ珍奇ノ木材又
 ハ偉大ノ木材ヲ以テ作りタル高價ノ天井ヲ備フ
 ルモノアラシ此ノ如キ異常ノ物件ハ之ヲ農業上
 ノ保險ニ付スヘカラス苟モ評價ノ手續ヲ簡易ニ
 シ所要ノ經費ヲ節減セント欲セハ宜シク此類ノ
 物件ヲ保險スヘカラスナルナリ

前文ニハ未タ第五類及第六類並舉ガルニ及ハサ
リシヲ以テ今其第五類トシテ列舉スヘキモノハ
酒、木綿絲、絹絲又ハ織物類ノ如キ再製農産物トス
但シ繭及綿等ハ適當ナル特別規則ヲ設ケ之ヲ以
テ原産(收穫)物中ニ算入スルヲ得ヘシ
又其第六類トシテ農夫ニ屬スル諸般ノ動産ヲ列
記セントス即チ衣服、家具、蒲團、厨具等是ナリ
右第五類及第六類ノ物件ハ之ヲ保險スルニ實施
上甚タ困難ニシテ且ツ純然タル農業上ノ性質ヲ
具ヘサルモノナルカ故ニ之ヲ農業外ノ保險ニ付
スルモ可ナリ顧テ農業保險ヲ實施スルニ至ラ
ハ日本人民ニ於テ大ニ保險思想ヲ興起シ工業保

險ノ繼テ起ラントハ恰モ他國ニ於テ不動産保險
ノ舉アリシ後數年ヲ經テ動産保險ノ起リタルト
一般ナルヤ必セリ

第五十條

余ハ日本ニ於ケル農業保險ヲ組織スルニハ右ノ
(又ハ右ニ類似ノ)保險スヘキ物件ヲ類別スルヲ以
テ基本トナシ而シテ之ニ對スル災害ノ種類ニ據
テサルヲ至當ナリト思考ス乃チ其第一類及第二
類ハ收穫保險トシ第三類ハ家畜保險第四類ハ家
屋保險トスヘキナリ
抑モ歐洲ノ保險法ハ元ト一定ノ規矩ニ出テタル
實ニ非スシテ各人隨意ノ主義ヲ以テ其會社ヲ

要旨タルモノナルカ故ニ其類別ノ主義各齊一
ナラス其物件類別ノ主義ヲ執ルモノハ家畜保險
ノ類ニシテ災害類別ノ主義ヲ執ルモノハ電害保
險及火災保險ノ類トス是ノ如ク其類別主義ノ畫
一ナラサルカ爲メ一ノ家畜ニシテ火災保險ト家
畜保險トノ保險ヲ受クルコトアリ而シテ若シ保
險會社不注意ナルカ又ハ被保險者ノ詐欺ニ罹ル
トキハ火災ニ際シテ兩會社ヨリ其辨償ヲ交付ス
ルコトアルヘシ加之此方法タルヤ危險ノ性質ヲ
含蓄スルモノナリ何トナレハ被保險者一人ニシ
テ火災ノ爲メ兩會社ノ辨償ヲ受ケ却テ利益ヲ得
ヘキトキハ故テニ放火スルノ非舉ヲ起サシムレ

ハナリ又若シ災害ヲ以テ類別ノ主義トスルトキ
ハ種々ノ不利アルモノナリ請フ左ニ之ヲ述ヘン
抑モ災害ヲ以テ類別ノ主義トセハ稀ニ至ル所ノ
災害ニ對シテハ實際保險ヲ望ムモノナカラン故
ニ海嘯噴火暴風雨等ノ如キ天災ニ對シ特ニ其保
險會社ヲ設立スルハ益シ甚々難カルヘシ然ルニ
此天災ノ禍害ヲ逞クスルヤ其慘烈言フニ忍ヒサ
ルモノニシテ之カ爲ニ破産流離スルモノ千ヲ以
テ數フルニ至ルコト少シトセズ此時ニ方リテ之
ヲ救済スヘキ保險會社ノ設ケアラサルヲ以テ縱
ヒ慈善者ノ義捐金アリテ其額夥多ナリト雖之ヲ
頭分配付スレハ僅々數十錢共計バリ多キモ數圓

超エスシテ十分ニ救済ノ目的ヲ達スルコト能
ハサルヘシ夫レ是ノ如ク農民ヲシテ不幸ノ極ニ
至ラシメ之ヲ救援スルノ路ナキモノハ其國保險
ノ類別主義宜ヲ得サルノ致ス所ト謂ハサルヲ得
ス何トナレハ若シ此災害類別ノ主義ニ由ラスシ
テ物件類別ノ主義ヲ用キシメハ其物件ハ如何ナ
ル災害ニ對スルモ(但シ一二ノ災害ニ對シテ之ヲ
保險セサルノ定限アルハ固ヨリナリ)之ヲ保險ス
ルコトヲ得テ以テ此ノ如キ不幸ヲ救済スヘキヲ
以テナリ此物件類別ノ保險法ハ余ノ嘗テ聯合保
險ト稱シタルモノニシテ其主義ハ歐洲保險法ノ
組織中唯家畜保險ノミニ行ハレタリ例ヘハブレ

ウシエウワイヒ國普通家畜保險會社定款第一條
第一項ニ曰ク家畜所有者ハ相互ニ一會社ヲ構成
シ左ニ掲クル所ノ止ムヲ得サル事故ニ因リ馬、驢、
騾、牛、豚及山羊ヲ屠殺シ又ハ斃死シタルカ爲ニ生
スル社員ノ損害ニ對シ相互ニ保險スルモノトス

第一 傳染病其他天然ニ生スル疾病
第二 所有者ノ過失ニ因ラサル不幸及火災
第三 耶蘇魁祭日ヨリ密其兒祭日マテ絶エス

保險ヲ受ケ其間病疾ニ罹リタルコトナ
キ馬ノ癡鈍ノ病ニ罹リ使用ニ耐ヘサル
カ爲ニ生スル損害云々

前災ニ掲クル所ノ理由アルニ因リ此諸災害ニ對

夫は聯合保險ノ主義ヲ以テ農業保險ノ類別主義トシ各種ノ災害ニ對シテ物件ノ保險ヲナストハ保險上甚々重要ナリトス且ツ此類別主義ヲ用ウレハ被保險者並ニ其債主ニ安意セシムヘキ事情アルノミナラス又保險金ノ割合ヲ定ムルノ方法簡易ニシテ經費ヲ節減レ得ルノ便利アリ故ニ農業保險法ハ左ノ類別ヲ爲スヘシ

總稱 農業保險

類別

- (一) 收穫保險 左ノ物件ヲ保險ス
 - (イ) 現ニ果穀アル土地
 - (ロ) 未收穫ノ果穀

(ハ) 收穫シタル果穀

(ニ) 農具

(三) 家畜保險 家畜(當分ノ内牛馬ノミ)ヲ保

險ス

(三) 家屋保險 家屋ヲ保險ス

第五十一條

保險金ノ割合ハ收穫保險ニ在テハ地價ヲ以テ家畜保險及家屋保險ニ在テハ各其物件ノ評價額ヲ以テ標準トシテ之ヲ定ムルコトヲ得ヘシ但シ被保險物件ニシテ屢同一ノ災害ニ遭遇スルノ恐アルモノ例ヘハ某ノ土地ノ洪水ニ於ケルカ如キモノニ在テハ其標準トシタル價額ヲ割増ヲナシ(保險

増加スル為ニ非ス以テ保險料ヲ増加スヘキ
 ナリ
 而シテ一類中ノ各物件ニ對シ各罹害者ニ一ヶ年
 間ニ於テ支拂フヘキ保險金ノ最高額ヲ定ムルニ
 ハ單一ナル算則ヲ以テスルヲ得ヘシ其例左ノ如
 シ

(第一) 收穫保險

保險金最高額

(イ) 土地

地價百分ノ

百

(ロ) 未收穫ノ果穀

同

何程

(ハ) 收穫物

同

何程

(ニ) 農具

同

何程

(第二) 家畜保險

家畜

家畜ノ評價百分ノ

百

(第三) 家屋保險

家屋

家屋ノ評價百分ノ

百

保險シタル諸物件災害ニ罹リタルトキ定期内ニ
 於テ被保險者ノ報道ヲ受クレハ其時々災害ノ大
 小輕重ヲ評定シ其原因ヲ精査スヘシ
 災害ハ其原因ノ如何ニ由リテハ其損失ノ全額若
 クハ幾分ヲ辨償シ又ハ全ク辨償セサルコトアル
 ハシ(第三十一條ヲ參者スヘシ)

第五十二條

又保險金ハ全國聯合保險組合ヲシテ平等ニ其全
 額ヲ負擔セシムルヲ要セス並ニ各組合ヲシテ

之負割合。負擔セシムヘシ然身以則チ實際ニ於テ
多ク其利益ヲ見ントス今假ニ各府縣毎ニ自治ノ
保險組合アリトセンニ一府縣ニ於テ損害ニ遭フ
トキハ損害全額ノ五分一ヲ其府縣組合ニ負擔セ
シメ五分四ヲ聯合組合ノ負擔トナスヘシ此ノ如
クスレハ則各府縣ニ於テ過實ノ損害高ク虛稱シ
テ保險辨償額ヲ多クシ故ラニ自己組合ノ損失ヲ
増スノ愚ナカルヘシ若シ然ラズシテ之ヲ聯合組合
ニ平等負擔セシムルトキハ各組合ハ自己ノ府縣
ヲ偏愛シ全國ノ金錢ヲ其地方ニ網取スルノ念ヲ
生シ其地方ノ損害高ク詐稱シテ其極徒ニ保險料
ノ割合ヲ増加セサルヲ得サルニ至ルヘシ

是主意ニ據リ巴丁大侯國ニ於ケル家畜保險ノ如
キハ下ノ事項ヲ定メタリ曰ク町村組合ハ支拂フ
タル辨償金ノ五分一ヲ負擔シ郡區組合ハ其五
分ノ四ヲ負擔スト
余カ此考按タルヤ但保險事業ノ概畧ヲ述フルニ
過キス若シ數多ノ災害ニ就キ逐一日本保險組合
府縣保險組合(郡保險組合町村保險組合等)及被害
者ニ損害金ヲ分擔セシムル種々ノ理由ヲ講説セ
ントセハ極メテ瑣細ナル事項ニ涉ラサルヲ得ス
(第三十一條ヲ參看スヘシ)故ニ今之ヲ畧シ單ニ一
言ヲ陳セン曰ク其分擔方ヲ定ムルニハ毫モ困難
ニ見サルナリ何トナレハ府縣保險組合事務所ニ

於極メテ單簡ナル計算法ト簿記方トヲ以テ此
分擔方ヲ定メ得レハナリト(第三十二條ヲ參看ス
ヘシ)

各府縣保險組合事務所ニ於テ一年間ニ支拂ヒタ
ル辨償金總額ノ内償還ヲ受クルモノ左ノ如シ

(甲) 日本保險組合ヨリノ償還

(乙) 郡又ハ所村保險組合(府縣保險)ヨリノ償
還

其辨償金總額ニ加算スヘキモノ左ノ如シ

(丙) 府縣保險組合ヨリ日本保險組合ヘノ納金

(損害金、中央經費)
中央資金、爲ノ

(丁) 府縣保險組合ノ經費

(戊) 府縣保險組合資金ノ積立金

右ノ計算法ハ左ノ三種ニ分ツヘシ

收穫保險

家畜保險

家屋保險

第五十三條

茲ニ尚ホ一言ノ附載スヘキモノアリ曰ク保險會
社ヨリ被保險者ニ保險金ヲ支拂フヘキ諸般ノ場
合中政府又ハ地方金庫ヨリ其全額若クハ半額ヲ
其會社ニ交付スヘキモノアリ左ニ掲ル所ノ災害
即チ是レナリ

(四) 戰亂一揆ノ害

(五) 洪水ノ害

(六) 數種ノ虫害

(七) 數種ノ植物病害

(八) 數種ノ畜疫

(イ) 戰亂一揆ハ全國ニ關スルノ事件ニシテ決シテ各人ノ與リ知ル所ニ非ス故ニ其損害ノ賠償ハ固ヨリ全國人民ヲシテ負擔セシムルヲ以テ當然トスヘシ歐洲諸國ノ法律ニ在リテハ未タ一般ニ之ヲ承認セス(是レ歐洲法律ノ缺點ナルコト明カナリ)ト雖モ其主義ヲ適用セル場合少カラサルナリ例ヘハ獨逸國ニ於テハ獨佛戰爭ノ爲メ損害ヲ被リタル船舶所有者ニ佛國ヨリ得タル所ノ五億萬

馬克ノ償金ヲ交付シテ以テ其損害ヲ辨償シ又英國ニ於テハ「ミストル」キルデルス一按ヲ起シテ近時社會黨騷擾ノ爲メ損害ヲ被ムリタル倫敦府民ニ其損害額ヲ辨償スヘシトノ議ヲ建テ之ヲ國會ニ提出シタリ又支那ニ於テハ米合衆國ニ對シテ嘉利福尼州支那人逐放令ノ爲メ同國人ノ被リタル損害要償ヲナシタリ是レ皆戰亂一揆ノ害ハ宜シク全國ニ於テ其義務ヲ負擔セサル可ラストノ主意ニ出タルモノナリ其他歐洲諸國ニ於テモ屢此主意ヲ以テ東洋諸國ヨリ損害要償金ヲ得タルコトアリ

(ロ) 洪水ノ害ハ一縣若シクハ數縣ニ於テ多少ノ罪

アルヲ常トス何トナレハ凡ソ洪水ハ縣廳ニ於テ
森林保護水理規畫及堤防保護ヲ怠リ若クハ堤防
ノ高低厚薄ヲシテ其宜ヲ得サラシムル等ニ由リ
テ其害ヲ逞クスルモノナレハナリ然ルニ方今各
國共ニ洪水ノ損害ニ對シ縣廳又ハ政府ニ於テ其
全額若クハ一介ヲ負擔スルノ法律ヲ設ケタルモ
ノナシ是レモ亦一ノ缺點ト謂フヘキナリ
(ハニ及ホ)又傳染質植物病蟲害及畜疫ハ國庫金ヲ
以テ罹災者ノ損害ヲ賠償スレハ之ヲ隱蔽スルノ
患ナク爲ニ豫防ノ策ヲ施スニ容易ナルカ故ニ全
國ノ利益トナルモノナリ故ニ字國ニ於テハ「フイ
ロキセ」病ノ爲メ傷損シ又ハ枯死シタル葡萄樹

ニ對シテハ國庫ヨリ之ヲ辨償ス又警察署ノ命令
ヲ以テ撲殺シタル動物又ハ疫病ノ爲メ斃死シタ
ルコト明カナル動物ニ對シテハ普通價額ニ由リ
テ全額ヲ補償シ其他一二ノ畜疫ニ至テハ特ニ其
損害ノ幾分ヲ補償ス例ヘハ鼻涕病ハ普通價額ノ
四分ノ三肺疫ハ五分ノ四ヲ補償スルカ如キ是レ
ナリ其金額ハ皆國庫金ヲ以テ之ヲ支辨シ而シテ
鼻涕病及肺疫ハ各州組合ヲシテ其若干額ヲ負擔
セシム此法タル亦一種ノ強制保險ト謂フヘシ是
レ地方組合ニ於テ特殊ノ規則ニ從ヒ牛馬及驢騾
ノ所有主ヲシテ其金額ヲ負擔セシムルヲ以テナ
リ又此組合ハ其決議ヲ以テ痘瘡ノ爲メ斃レタル

第三對シテ右ト同様ナル補償金を交付スルコト
 アリト云フ抑各保險組合ノ得益如何及保險事業
 ヲ組成スヘキ方法如何ハ府縣貯金兼土地抵當貸
 付會社ノ事及農業上ニ必要ナル種々ノ貯金法ヲ
 論述シタル後ニ至リテ之ヲ記述スヘシ

第三章 貯金法

第一項 府縣貯金兼土地抵當貸付會社

第五十四條

府縣貯金兼土地抵當貸付會社ナルモノハ即チ夫
 ノ獨逸國ニ於テ町村縣廳及州廳ノ保證ヲ受ケ其
 業ヲ營ム所ノ數千ノ貯金預所ニ異ナラサルモノ
 ナリ抑モ獨逸國ノ貯金預所ハ土地抵當ノ貸付ヲ

ナス一大會社ニシテ其貸附ノ業タルヤ却テ抵當
 貸付會社ヨリ盛大ナリトス今左ニ千五、ロツセル
 ノ獨逸郵便貯金預所及地方貯金預所論(千八百八
 十五年刊行)第五十九項以下ヲ抄出シテ其然ル所
 以ヲ示サン
 ロツセル曰ク凡ソ我國ニ於テ貯金預所ノ預金ヲ
 運轉スルハ左表ニ掲載スル如ク抵當貸付ヲ以テ
 最モ盛ナリトス

國名	年度	貸金總額	抵當貸付金
普魯士國	千八百八十二	四七〇	二六〇・五
巴華里國	千八百八十二	二九	一六〇・五

銀貨百萬圓ヲ以テシテ
 (壹圓ハ四馬ニ當ル)

銀貨百萬圓ヲ以テシテ
 貸金總額ニ對スル
 割合
 五分

撒遜國	千八百八十一	九三、二五	六六、七五	七
巴下國	千八百八十一	三九	二七、七五	七一
合計		六三一、二五	三七一、〇五	五九

是ニ據リテロツセルハ獨逸全國貯金預所ノ預金總額銀貨七億五千萬圓餘ノ内抵當ヲ以テ貸付ケタル總額ヲ銀貨四億五千萬圓ト算定シタリ又曰ク故ニ我國ニ於テ抵當ヲ以テ貸付ヲナス諸會社ノ中貯金預所ヲ以テ最モ大ナリトスト蓋シ獨逸全國ノ抵當貸付銀行三十二行ニ於ケル千八百八十年年末ノ抵當貸付金總額ハ僅ニ銀貨三億九千七百萬圓ニ過キサリシヲ以テナリ又曰ク王國撒遜貯金預所ノ不動産抵當貸付ノ事業ハ殊ニ

隆盛ナリトス何トナレハ該國五大土地抵當貸付會社ノ抵當貸付金總額ハ之ヲ該國貯金預所ノ抵當貸付金ニ比スレハ其半額ニ及ハサルヲ以テナリ今一千八百八十二年末ニ於ケル土地抵當貸付會社ノ貸付金總額ヲ舉クレハ左表ノ如シ

土地抵當貸付會社名	銀貨	百萬圓ヲ以
世襲騎士領地抵當貸付會社	一一、二五	
農業土地抵當貸付會社	八、二五	
オーベルラウジッツ顯族銀行	五、五〇	
獨逸土地抵當貸付會社	四、二五	
ライプキヒ抵當銀行	〇、二五	
合計	二九、五〇	

而シテ該國貯金預所ノ抵當貸付金總額ハ銀貨七
 千百萬圓ニ昇レリト
 又曰ク千八百八十二年末撒遜國諸貯金預所抵當
 貸付金ノ利子ハ四厘六七ナリ是レ該國貯金預
 所ノ土地ニ對シテ低利貸付ヲ爲スノ一證トナス
 ヘシ
 然シテ貯金預所抵當貸付事業ノ隆盛ナル所以ノ
 モノハ主トシテ數多ノ抵當貸付銀行ニ於テ拒絶
 スル小額ノ貸付ヲナスニ因レリ
 千エロツセルハ此事業ニ付一證ヲ舉ケタリ今其
 引證スル所ニ據レハ大市府ノ貯金預所ヲ除クノ
 外多クハ其抵當貸付金ノ三割一分乃至四割四分

ハ一口ノ金高銀貨二百五十圓迄ヲ以テ又六割三
 分乃至八割二分ハ一口ノ金高銀貨七百五十圓迄
 ヲ以テ貸付クルヲ見ルヘシ其舉クル所ノ證ハ左
 表ノ如シ

貯金預所	年度	貯金預所書入質貸付金百口ノ内					
		銀貨 百二十五圓 以下	百二十五圓 以上	二百五十圓 以上	二百五十圓 以上	二百五十圓 以上	二百五十圓 以上
ターラント	千八百八十一	一五	一七	三五	一一	一四	七
シエニベルヒ	千八百八十二	一八	二〇	三二	九	一二	八
ヨースタット	千八百八十二	一五	二九	三四	一一	七	五
クローシェールスドルフ	千八百八十二	九	二二	五一	一〇	五	三
ローター	千八百八十三	一四	二一	三六	一〇	一六	二

ロツセル	千八百十三	一	五	三	五	二	一	五	六	五	一	六
------	-------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ロツセルハ又撒遜國貯金預所ノ抵當負債者ノ數ヲ九萬五千人(即チ該國人口三十二分ノ一)トシ其平均一口ノ金額ヲ銀貨七百五十圓トナシ而シテ諸土地抵當貸付會社ノ抵當負債者ノ數ヲ七千五百人トシ其一人ノ負債額ヲ平均四千九百二十五圓トナセリ

又曰ク貯金預所ハ多クハ其抵當貸付ノ區域ヲ近地ニ限ルカ故ニ負債者ノ状態及抵當トナシタル土地ノ狀況ヲ監査スルコトハ之ヲ貸付ノ區域廣濶ナル大會社ニ比スレハ容易ニシテ且ツ周到ナリトス

故ニ貯金預所ニ於テハ預金ニ危害ヲ蒙ラシメスシテ其貸付金ノ制限ヲ寛裕ナラシムルヲ得ヘキモ大會社ニ於テハ貯金預所ニ比スレハ晝一ノ制限ヲ設ケ之ヲ確守セサルヲ得サルハ勢免カレ能ハサルナリ

ロツセルハ又貯金預所ニ於テ定期又ハ臨時ニ係ル貸付元金ノ返還金最少額ヲ五タール(即チ銀貨三圓七十五錢)トナシ以テ細民ヲシテ困苦ヲ感セスシテ漸次其負債ヲ償却セシムルノ事アルヲ述ヘテ曰ク貯金預所ハ負債主ニ許スニ年賦償還金ノ定額ヨリ以上ノ金員ヲ返納スルコトヲ以テ其定額外ノ金員ニハ預所ニ於テ定率ノ利子ヲ

附シテ之ヲ増殖セシメ主トシテ負債ノ償還金ニ充ルト雖其間若シ負債者ニ於テ窮困ニ陥ルトキハ何レノ時ニ於テモ此金員ヲ一時借用スルコトヲ許シ又ハ前約ヲ改締シテ更ニ償還濟金員ヲ借用スルコトヲ許セリト此他特別ノ事情及ヒ契約アルモノハ其貸付金ヲ幾多ノ少額ニ分割シ短少ノ期限ヲ定メテ返濟スルヲ許シ或ハ原金一ターレル(凡ソ七十五錢)ニ付一週一グロツセン(二錢五厘)ツ、ノ割合ヲ以テ返辨セシムルモノモアリトス又エーレンベルゲルノ墺國貯金預所論(千八百七十二年維也納府刊行)ニ據レハ該國諸貯金預所ニ

於テ其預金ヲ運轉スルノ割合左ノ如シ

- 土地抵當 六割許
- 有價證券 一割六分五厘
- 短期運轉金 一割餘
- 債券 五分許
- 割引爲換券 四分許
- 準備金 二分餘
- 不動産 七厘五
- 其他ノ財産 一分五厘餘

而シテ此債券ハ重ニ土地義務解放公債證書抵當證券及ヒ年賦償還公債證書トスエーレンベルゲル曰ク墺國貯金預所ニシテ資本員運轉其宜ヲ得

カシテ爲ニ預ケ人ニ損失ヲ被ラシメ若クハ閉店
ヲナスニ至リタルモノハ五十年以來未タ曾テア
ラサルナリト

余ハ又エーレンベルグノ墾國第一貯金預所ト
題スル談國最大ノ貯金預所ニ係ル報告書中ヨリ
抵當貸付ニ關スル二三ノ事項ヲ舉ニ談預所ノ
千八百七十二年末ニ放ケル抵當貸付金總額ハ銀
貨二千萬圓以上ニシテ預所財産ノ四割四分一五
強ナリ今其市府地及ヒ耕地ヲ抵當トシテ貸付タ
ル金額ヲ見ルニ談貯金預所各店ノ内首府ニ在ル
モノヨリ市府地ニ對シ貸付タル金額甚タ多ク其
割合左ノ如シ

市府地ヘノ貸付金 口數一萬五千三百十七口

金額銀貨千八百十萬七千九百四十三圓

耕地ヘノ貸付金 口數六千一百一口金額銀貨二

百五十八萬八千六圓

合計貸付金口數二萬千四百十八口金額銀貨二

千六十九萬五千九百四十九圓

又左表ニ據レハ貯金預所ハ主トシテ細少ナル家
屋及土地ノ所有主ニ抵當貸ヲナシ以テ之ヲ扶助
スルヲ知ルヘシ

表中第一欄ハ貸付元金ヲ示シ第三欄ハ元金ノ内
ヨリ既ニ月賦償還シタル分ヲ差引キ其殘額ヲ舉
示ス

貸付金總高口數及一口ノ貸付額

貸付元金	口數		現在貸付金額	
	フロリン以上	フロリン以下	フロリン	クローナ
五七九	〇〇〇	〇〇〇	五三〇	六五
二四九	〇〇〇	〇〇〇	一三〇	五九
一六五	〇〇〇	〇〇〇	二二五	二〇
一五四	〇〇〇	〇〇〇	一四〇	〇〇
一四三	〇〇〇	〇〇〇	一四〇	〇〇
一三二	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
一〇九	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
〇八九	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
〇七六	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
〇六五	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
〇五四	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
〇四三	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
〇三二	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
〇二一	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
〇一〇	〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇
總計	五八〇	二〇〇	四一三	六五

前表ニ由リテ之ヲ觀ルニ千八百七十二年末貸付金ノ中千フロリント五千フロリシ(即チ銀貨五百圓乃至二千五百圓)ノ間ニ居ルモノ最モ多ク十萬フロリシ以上ニ居ルモノハ二十口ナリ

右貸付金ノ内一萬五千二百六十四フロリシハ其償還期限二十年ニシテ六千五百フロリシハ二十年其他ハ十年乃至四十一年ナリ

又抵當トナスヘキ家屋ハ貸付所ノ是認スル所ノ墾國火災保險會社ヨリ相當ノ金額ヲ以テ保險ヲ受ケタルモノニ限レリ

然シテ抵當貸付ノ法ハ大ニ負債者ニ便益スルモナリト雖モ其元金ヲ幾多ノ小額ニ分割シテ永

年賦ニ償還セシムルカ故ニ年終償付所ニ收入ス
ル所ノ償還金ハ貸付元金ニ對スレハ其割合甚々
僅少ナリトス
是ヲ以テ貸付所ハ六ヶ月以前ニ於テ負債者ニ通
知シテ貸付金ヲ返還セシムルノ權ヲ有セリ然レ
トモ貸付所ニ於テハ非常ノ困難ニ臨ムモ猶ホ未
タ此權ヲ實用シタルコトアテサリシナリ
資金運轉ノ溢滞セシコト斯ノ如キカ故ニ到底貸
付事業ヲ盛大ニスルコト難キヲ以テ預所ハ抵當
證券發行所設立ノ必要ナルヲ感シ千八百六十九
年五月一日内務卿ノ允許ヲ得テ之ヲ開設シタリ
其抵當證券ニ關スル要點ハ左ノ如シ

第五十五條

此ノ抵當證券ハ墾國第一貯金預所ノ抵當證券發
行所ノ債券ニシテ之ヲ無記名トナシ利子ハ半年
末毎ニ其所有者ニ下渡シ元金ハ抽籤法ヲ以テ償
還スルモノトス。利子下渡及元金償還ニ付テハ
抵當證券ニ對シテ發行所ニ差入シアル諸抵當物
並ニ準備金及ヒ其他ノ財産ヲ以テ引當トナス。
抵當證券ノ金高ハ決シテ抵當物ノ價額及ヒ償還
資金ノ高ヲ超過スルヲ許サス。償還資金ハ抽籤
ノ時マテニ拂込タル年賦償還金及ヒ負債者ノ部
合ニ由リ拂込タル償還金ヲ以テ之ニ充ツ
其抵當證券並ニ資本家抵當證券發行所及負債

者ニ付テノ利害得失ハ余ノ千八百八十三年ヲ以テ著ハシタル日本第一土地抵當貸付會社論ニ於テ之ヲ詳説シタリ本論ハ原華族會館ハ建言シタルモノニシテ當時花房直三郎之ヲ翻譯セリ請フ就テ其詳細ヲ省ルヘシ然リ而シテエーレンベルグノ說明ニ據レハ墾國第一貯金預所ニ於テ抵當證券發行ノ爲メ得ル所ノ利益ハ左ノ如シ

第一 貯金預所ハ抵當證券ヲ發行スルトキハ貯金預入及拂戻ノ有無ニ關セス低利ヲ以テ地主ニ充分ノ金額ヲ貸付クルコトヲ得

第二 貯金預所ハ何時ニテモ其發行シタル抵

當證券ヲ買收シ之ヲ貯藏スルコトヲ得此證券ハ確實ニシテ且ツ市價ノ最低甚シカニサレラ以テ貯藏スルニ於テ曾テ損失ノ恐ナキモノトス

第三 貯金預入貯金ノ拂戻ヲ請求スル者多ク爲ニ資金ノ不足スル時ニ當リ預所ニ於テ若シ抵當借用證書ヲ取引所ニ出シテ賣却セント欲スレハ則チ購求者ナキニ苦ミ又之ヲ一個人ニ賣ラント欲スレハ則チ損失ヲ被ルノ恐アリ然ルニ今抵當證券ヲ發行スルトキハ之ヲ取引所ニ出賣シテ容易ニ所要ノ金額ヲ獲ルコトヲ得

第四

預所ハ其發行シタル抵當證券ヲ更ニ抵當トシテ貸付ヲナスコトヲ得而シテ預所ハ是ニ由リ短期ヲ以テ其金額ヲ運轉スルコトヲ得ヘク且此有價證券ノ通用區域ヲ廣ムルコトヲ得ヘシ

第五十六條

前諸條ニ陳スル所ノ獨逸國並ニ奧地利國貯金預所就中前條末項ニ掲クル維也納府貯金預所ノ事項ハ以テ土地抵當貸付ヲ兼攝スル貯金預所ノ日本農業上ニ必要ナルコトヲ證明スルニ足ラン然ルニ日本ニ於テハ町村自治ノ制未タ立タス又郡會ノ設アラサルカ故ニ獨立シテ以テ金錢ヲ管

理使用スル町村立貯金預所及郡立貯金預所設立ノコトハ姑ク措テ論ヤス首ニ府縣立貯金預所設立ノコトヲ論述スヘシ而シテ其府縣立貯金預所トハ即チ余カ前ニ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ト名ツケ二種ノ性質アルヲ明カニシタルモノ是レナリ

千八百八十二年度ノ帝國貯金預所ト題シ千八百八十四年ニ刊行セル千五、ベツ、ツ、オウノ帝國統計局ノ統計雜誌ニ掲ケタル所ニ據レハ市府、寺領、聚落、鄉村、郡、區、縣、州及各州會ノ自ラ經營シ及保證スル所ノ貯金預所(其他ノ貯金預所ヲ除ク)ノ數左ノ如キ

貯金預所ノ別	貯金預所ノ數	代理店及支店數	集金及交付所ノ數
一 市府貯金預所	五一七	二	一〇一
二 寺領聚落鄉村貯金預所	一〇四	二	四
三 郡區貯金預所	二〇八	一七四	三八七
四 縣立貯金預所	八	一	一
五 州立及顯族貯金預所	五	一一〇	一

寺國ニ於テ一百以上ノ寺領聚落、鄉村及二百八十ノ郡區ニ舉行シ得タル所ハ日本ニ於テモ正當精確ナル管理法ヲ設ケナハ之ヲ各府縣ノ要地ニ舉行シ得ヘキコト必セリ然ルヲ日本全國ニ唯一所ノ貯金兼土地抵當貸付會社ヲ設立シ故テニ不便

ヲ起スヲ要セサルナリ今ヤ日本ニ於テハ幸ニ府縣會ノ在ルアリ而シテ貯金預所ハ監督ト保證トヲ要スルモノナルカ故ニ宜シク該會ノ決議ヲ經テ之ヲ各府縣ニ設立シ其保證ヲ受ケ且ツ該會ノ撰任スル監視員又ハ府縣會委員ヲシテ之ニ參與セシメ以テ其事務ヲ處理セシムヘシ是即チ自治ノ基礎トナリ且ツ自治ニ勢力ヲ與フルモノナリ而シテ府縣知事ノ之ニ對スルハ恰モ寺國ノ州長ト同シカヲシメテ可ナリ寺國ノ州長ハ一定ノ原則ニ據リテ貯金預所ノ設置ヲ許可シ及其規約ヲ認可シ又ハ認可セサルノ權利ヲ有スルモノナリ又政府ニ於テ町村貯金預所ニ對スル監督方ハ其

他ノ町村公舎ニ對スルモノハ其範圍ヲ同クス(千八百三十八年十二月十二日發布ノ貯金條例第九條及第二十條ニ據ル)ト雖氏特ニ州長及縣令ヲシテ左ノ義務ヲ負シメタリ曰ク州長及縣令ハ平常貯金預所ニ注視シテ其事務ノ沮滯紛雜ナキヤ否ヲ瞭知シ又不時ニ出納ノ檢査ヲ爲シ及其檢査ヲ命シ且ツ其不整頓又ハ弊害アルヲ認ムルトキハ嚴ニ之ヲ匡正スヘシ且州長ハ各預所ヲシテ毎年其事務報告書及成績書(内務大臣ヨリ一般ニ命令シタル書式ニ依ル)ヲ差出サシメ之ヲ取纏メテ全州ノ大明細書ヲ調製シ内務大臣ニ進達スヘシ余ノ所見ヲ以テスレハ日本ニ於テ百般ノ町村事

務ニ付府縣自治制ノ一層擴張スルニ至ルマテハ暫ク府縣知事ニ付スルニ字^レ國州長ヨリモ更ニ廣濶ナル權利義務ヲ以テスヘキナリ

第五十七條

余ハ爰ニ府縣立貯金預所ヲ兼ヌル各府縣ノ抵當證券發行所ヲシテ中央抵當證券發行所ノ媒介ニ依リテ相聯合セシムルノ方法ヲ論スヘシ之ヲ海外諸國ノ實驗ニ徵スルニ四十ヶ所ノ府縣ヨリ各自ニ抵當證券ヲ發行スルトキハ其證券ハ取引所ニ貴重セラレサルヘキヲ以テ之ヲ賣買運轉スルコト自ラ少カラン隨テ其相場ノ如キモ亦一種(又^ハ二三種)ノ抵當證券ヲ賣買スルニ比スレハ其低

庶ナルヘキコト必セリ然シテ中央抵當證券發行所ニ於テ之ヲ媒介スルノ方法ハ極メテ簡單ナルヲ得ヘシ其方法タル各府縣發行所ヨリ發行スル諸抵當證券ハ之ヲ現金ト交換セシテ中央發行所ノ抵當證券ト交換シ而シテ各府縣發行所ニ在リテハ常ニ中央發行所ノ證券ノミヲ以テ融通シ談證券ノ利子及元金ハ中央發行所ニ湊集スル府縣發行所ノ證券高ニ應シテ之ヲ拂渡スヘキナリ中央抵當證券發行所ト各府縣抵當證券發行所トノ連絡ニ關スル其他ノ事件ヲ此ニ陳スルハ大早計タルヲ免レス姑ク之ヲ措ク

第五十八條

府縣貯金兼土地抵當貸付會社ハ一般ノ貯金預所ニ同シク兩般ノ事務ヲ要スルモノナリ余ハ此マテ主トシテ金錢ノ運轉方ヲ説ケリ今更ニ進シテ貯金ノ取集方ヲ説カント欲ス余ハ農民ノ貯金ヲ必用トスル所以ニニアリト信ス左ノ如シ

(第一) 農業資金

(第二) 凶年豫備資金

此二項ニ應シテ二種ノ貯金方法ヲ行ハンコトヲ冀望ス其一ハ節儉蓄積シタル金錢ハ再々速ニ預人ノ手ニ歸シ之ヲ使用セシムルヲ得ル方法ニシ其其二ハ之ニ反シ拂込ミタル金錢ハ收入多額ノ

詳ニハ志ニ其受戻ヲ爲スコト能ハサラシムルノ
方法はナリ

余ハ此二種ノ方法ヲ實行センカ爲メ左ノ二種ノ
貯金預所ヲ設定アランコトヲ稟議ス

(イ) 驛遞町村貯金預所

(ロ) 農民貯金組合

第二項 驛遞町村貯金預所ノ事

第五十九條

驛遞町村貯金預所ナルモノハ決シテ獨立ノ貯金
預所ニ非ス其町村ノ戸長ヲ以テ之カ長トナシ近
傍ノ郵便局又ハ郵便受取所ヲシテ之ヲ幫助セシ
メ中央貯金預所ナル東京貯金預所ニ附屬セシム

ルモノニシテ恰モ學校貯金ニ於テ校長ヲ其預所
ノ長トナシ之ヲ主理セシムルカ如シ余頃日驛遞
學校貯金論ヲ草シ各種ノ有利息及ヒ無利息貯金
切手ヲ使用シ各地學校(又ハ町村)貯金預所ニ於ケ
ル書類ノ書式記簿及利息計算ノ方法並ニ中央貯
金預所ニ於ケル貯金預人原簿記載ノ手續ヲ省ク
コトヲ得ヘキ方法ヲ詳説シテ大日本教育會ニ寄
セタリ談書ハ大村仁太郎之ヲ翻譯シ近日同會ニ
於テ印刷ニ付シ將ニ世上ニ公ニセントス(頃日既
ニ之ヲ出版セリ)此方法ハ驛遞町村貯金預所ニ於
テモ亦之ヲ用ウルヲ得ヘキカ故ニ今之ヲ談書ニ
譲リ此ニ贅言セサルヘシ

學校貯金預所ニ於テ果シテ一厘一錢及拾錢ノ三種貯金切手ヲ使用スルモノトナサハ町村貯金預所ニ於テハ一錢及拾錢ノ貯金切手ヲ以テ足レリトス或ハ更ニ五拾錢ノ貯金切手ヲ使用スルモ亦可ナラシ

學校貯金預所ニ於テハ其學校ノ教員ヲシテ貯金事務ヲ取扱ハシメ町村貯金預所ニ於テハ戸長又ハ戸長ノ撰任シタル役員若クハ町村民ノ撰舉シタル者ヲシテ其事務ニ當ラシムヘシ之ヲ要スルニ驛遞學校貯金預所規則ヲ移シテ之ヲ驛遞町村貯金預所ニ適用スルハ極メテ容易ナリトス夫ノ佛國ニ在テハ僅々ニ三年間ニ二萬一

千以上ノ學校貯金預所ヲ開設シタリ日本ニ於テモ亦二三年間ニ數萬ノ驛遞町村貯金預所ヲ開設スルハ敢テ至難ノ業ニ非サルヘシ何トナレハ町村貯金預所管理者ノ如キハ專ラ謹恪誠實ヲ要スルノミニシテ特殊ノ才能ヲ要スルモノニ非サルヲ以テ今日日本ニ於テ寒村僻地ト雖モ之ヲ得ルニ難カラサルヲ信スレハナリ驛遞町村貯金預所ニ預金ヲ爲スハ固ヨリ農民各自ノ隨意タルヘシ但シ其預金ヲ爲サント欲スルニ方リ或ハ其村ニ郵便局ナクシテ遠路ヲ行カサルヲ得サルノ不便アルヘキヲ以テ其地ノ戸長又其町村ノ貯金取扱人ニ就キ貯金切手ヲ購求シ

其貯金トシテ預ルノ便利ヲ得セシムヘシ
第六十條

貯金兼土地抵當貸付會社、設立アル各府縣ノ驛
遞町村貯金預所ハ東京驛遞局貯金預所ヲ以テ貯金
ノ中央局トナサスシテ此會社ヲ以テ各其中央局トナ
スヘシ是レ余ノ既ニ前文ニ説ク所ニシテ其主意ハ各
府縣ノ金融ヲ圓滑ナラシム且ツ金融ノ公畫法ヲ
行フニ在リ其法猶ホ獨逸國ノ郵便貯金預所條例
草案ニ於テ全國一所ノ中央郵便貯金預所ヲ設ケ
スシテ各郵便管理局ヲ以テ其管理區ノ中央局ト
定メ區内各地ヘノ送金ヲ掌ラシムルカコトシ
第六十一條

驛遞町村貯金預所ヲ組成スルハ府縣貯金兼土地
抵當貸附會社ニ委セスシテ驛遞局ニ於テ之ヲ掌
ルヘシ是レ余業上ニ於テ當サニ然ルヘキノ事ト
ス何トナレハ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ハ保
險會社ノ事ニ關シテ已ニ充ルノ業務有ルヲ以テ
ナリ

第三項 農民貯金組合ノ事

第六十二條

農民貯金組合、農民ノ收穫金寡少ノ年ニ際シ其
蓄積シタル貯金ヲ拂戻シテ其急ヲ救フノ目的ヲ
以テ農民ニ貯金セシムル所トス

獨逸國ニ於テハ年長子女結婚裝具貯金組合(或ハ

此組合ヲ稱シテ年少子女祈福貯金組合ト云フ借
宅料貯金組合納税貯金組合冬期需用品購求貯金
組合等ノ如キ凡ソ避クヘカラサル種々ノ需用金
ニ付各種ノ貯金組合アリテ其數枚舉スルニ違フ
ラス此他療養費積金組合葬儀費積金組合及文武
官恩給補助金組合ノ如キモ亦一種ノ貯金組合ト
ス町村長クンチエンノ貯金預所及町村財務論(千
八百八十二年伯林出版第六十四頁)ニ曰ク此種ノ
貯金組合ニ關シ詳細記述スルトキハ徒ラニ本論
ヲシテ冗長ナラシムヘシ且ツ余ハ今完全ナル統
計表ヲ有セサレハ其詳細ヲ舉クルコト能ハスト
雖モ其旺盛ナル事ヲ知ラシメンカ爲メ左ニ一二

ノ例ヲ舉ン夫ノ人口三萬五千餘ノブラウエシ府
ニハ貯金組合ニケ所療養費積金組合五箇所葬儀
費積金組合四箇所文武官恩給補助金組合一箇所
及軍人貯金組合三箇所ノ多キニ及ヘリ又千八百
七十五年ノ戶籍帳ニ據ルニドレスデン府ニ於テ
ハ療養費積金及葬儀費積金組合四十一箇所教員
恩給補助金組合一箇所軍人貯金組合三箇所アリ
ト

第六十三條

中央貯金預所ニ於テ貯金組合ト事務ヲ連絡スル
トキハ該組合ヲシテ制限貯金通帳ヲ以テ其貯金
預所ケシムヘシ此制限貯金通帳トハ即チ貯金ヲ

拂戻スヘキ豫定ノ事故ニ際シ之ヲ貯金預所ニ證明スルニ非サレハ決シテ拂戻ヲ許サ、ルモノ是レナリ

各府縣農民貯金組合ニ於テ貯金ヲ拂戻スヘキ預定ノ事故トハ其府縣(又ハ郡)ノ收穫金寡少ノ時是レノミ蓋シ收穫ノ金額果シテ寡少ナルヤ否ハ農民別ニ其計算ヲ爲サ、ルモ自ラ能ク之ヲ知ルヘシ故ニ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ニ其事實ト制限貯金拂戻ノ必要アルコト、ヲ證明スレハ其府縣ノ農民又ハ其總代人ノ議決ヲ經若クハ府縣會又ハ其委員ノ議決ヲ經テ其地方各種ノ農民貯金組合員ヲシテ皆貯金拂戻ヲ爲スコトヲ得セシ

ムヘシ

第六十四條

農民貯金組合員ニハ各員ノ資力ニ應シテ定額ノ貯金ヲ爲サシムヘシ而シテ常ニ時日ヲ違ヘスシテ金額ヲ拂込ム者ニハ其此ノ如クセサル者ヨリハ高額ナル利息ヲ附スルコト、爲シ又中途ニシテ約定ノ金額ヲ拂込マサル者アルトキハ或ハ拂戻ヲ爲スニ至ルマテ其金額ヲ無利息預金ト爲スカ如キ方法ヲ設クヘシ又規約ヲ守ラズ且ツ不足ノ預金ヲ爲シタル者ニハ利率ヲ低クシテ少額ナル利息ヲ拂ヒ以テ其怠慢ヲ罰スヘシ今若シ此方法ヲ實施スルトキハ貯金組合員ヲシテ平素節儉

ヲ勤ムルノ氣風ヲ養成セシムルヲ得ヘキナリ

第四章 農民ヲシテ高利債主ノ刺薄ヲ免

レシムル方法

總論

第六十五條

民間經濟ノ法未タ完カラザルトキニ在リテハ(惟
フニ日本ノ民間經濟ノ如キハ最モ不完全ナルモ
ノトス)高利債主ヲシテ不幸ニ陥リタル者ノ膏血
ヲ吸取スルニ便ナラシム蓋シ無辜ノ民ヲシテ溝
壑ニ轉スルノ不幸ニ陥ラシムルハ人道ノ容レサ
ル所ナリ故ニ之ヲ萬國ノ歴史ニ徵スルニ腕力ヲ
以テ負債者ノ負擔ヲ免レシメタルノ實例ハ一二

シテ足ラズ或ハ平和ノ手段ヲ以テ之ヲ救ヒタル
ノ例ナキニ非スト雖モ是レ甚タ稀ニ見ル所ナリ
夫ノ賢明ナル雅典ノ立法官ソロン(紀元前五百九
十四年)ノ時ニ當リ雅典ニ負債者及債主ノ兩黨ア
リ而シテ氏ノ立法中ニ於テ一大事業ト稱スヘキ
モノハ下等人民ノ負擔ヲ輕減セシメタルノ一事
ニ在リ又羅馬國ニ於テハ數年間貴族ト平民トノ
間ニ最モ劇烈ナル爭鬪ヲナシタリ而シテ其爭鬪
タル獨リ平民ノ國政ニ參與セントスル所謂政治
上ノ爭鬪ノミニ止マテスシテ其負債ヲ輕減セント
スル所謂經濟上ノ爭鬪ナリ是レ紀元前三百六十
六年所謂「リキニウス」ノ法律ヲ發シ既ニ支拂ヒタ

ル利息額ハ負債者ノ負擔ヲ輕減セシメンカ爲メ
之ヲ元金ヨリ差引キ計算スヘシトノ一法ヲ以テ
平和ノ局ヲ結ヒタルニ由リテ之ヲ徵スヘシ

第一項 千八百七十七年九月十一日布告日
本利息制限法ノ事

第六十六條

日本政府ハ利率ノ昂低ヲ防ント欲シ千八百七十
七年九月十一日ヲ以テ現行ノ利息制限法ヲ發布
シタリ其法ニ曰ク金銀貸借上ノ利息ヲ分ケテ契
約上ノ利息ト法律上ノ利息トス(第一條)契約上ノ
利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ
利息ニシテ元金百圓以下一十年ニ付二割元金百

圓以上千圓以下一十年ニ付一割五分元金千圓以
上一十年ニ付一割二分以下トス若シ此限ヲ超過
スルトキハ裁判上無効トナシ此制限マテニ引直
サシム(第二條)法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約
ヲ以テ利息額ヲ定メサルトキ裁判所ヨリ言渡ス
者ニシテ元金ノ多少ニ拘ハラヌ六分トス(第三條)
第二條ニ定メタル利息ノ外人民相互ノ契約ニ依
リ禮金捧利等ヲ前引スルコトハ裁判上無効トス
(第四條)返還期限ヲ違ヘルトキハ負債者ヨリ債主
ニ對シ償金罰金違約金等ヲ差出スヘキコトヲ約
定スルコトアルモ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁
判官ニ於テ該債主ノ實際受ケタル損害ノ補償ヲ

不當ナリト思量スルトキハ之ニ相當ノ減額ヲ爲
スコトヲ得(第五條)
是ニ由テ之ヲ觀ルニ政府ハ縱ヒ利息制限法ヲ犯
スモノアルモ之ヲ罰スルノ意ニ非スシテ唯不當
ノ利息若クハ禮金ヲ請求スル者ニ法律上ノ保護
ヲナサ、ラント欲スルノミ然ルニ今制限ノ利息
六分ハ之ヲ日本ノ狀態ニ照スニ低廢ニ過クルヲ
以テ其結果タル常ニ成ルヘク契約ヲ以テ利息ヲ
定ムルコト、ナレリ

第六十七條

然シテ利息制限法ノ有效ナルヤ否ヲ知ラント欲
セハ須ラク左ニ掲クル所ヲ着ルヘシ

第一 余曾テ大藏省顧問ノ榮藏ヲ辱クシタルト
キ石造家屋ノ抵當ニ對スル普通ノ利息ヲ東京府
知事ニ問ヒシニ府知事ハ建物書入簿ヲ抄出シ其
要領ヲ報告シテ曰ク土藏等ノ書入ハ制限ノ利足
ニ依ルト雖モ債主ハ利息ノ外手数料ヲ前引スル
モノ、如シ而シテ其手数料額ハ幾何ナルヤ余輩
之ヲ聞クヲ得スト雖モ實際ニ就テ之ヲ觀ルニ或
ハ利息額ヲ超過スルモノアリ故ニ今精實ノ利息
額ヲ告クルヲ得スト
此報告ニ由テ之ヲ觀ルニ利息及手数料ヲ前引ス
ルコトヲ禁シタル利息制限法第四條ハ全ク徒法
ニ屬セリ又當時東京府知事ノ報告ニ據ルニ或ハ

百圓又ハ二百圓ノ貸金ニ付キ其利ヲ年二割又ハ
年一割八分トナスモノアリ故ニ制限利息ヲ超過
スルコト五分又ハ三分ナリトス又制限利息ノ割
合ニ據リ百圓以上三百五十圓未滿ノ貸金ニ付キ
年一割五分トスルモノモ或ハ手数料ヲ前引スル
ヤモ知ルヘカラス故ニ百圓以上千圓未滿ノ貸金
ニ付テハ常ニ制限利息ヲ超過スルモノナルヘシ
以上ハ東京ニ於テ行ハル、所ノ利息額トス今東
京ハ余輩ノ知ルカ如ク全國各地ヨリ巨額金錢ノ
流入スル所ナリ然ルニ猶且ツ此ノ如シ則チ各地
ニ於テ制限利息ヲ超過スルコト果シテ幾何ソヤ

第六十八條

第二 此問題ハ又農商務省商況年報ヲ以テ公ニ
シタル月別金利表ニ從テ五千圓以上一萬圓未滿
ノ貸金ニ對スル利息ヲ以テ之ニ答フルコトヲ得
ヘシ但恨ムラクハ表中ノ月名ニ徃々缺所アリ故
ニ余ハ此金利表ニ據リ千八百七十九年七月乃至
千八百八十一年五月ニ於ケル東京及福岡ノ計數
ヲ採リ務メテ閱覽ニ便ナラシメ且彼此ノ比較ヲ
精密ニセンカ爲メ甲地ニ於ケル月數ニ缺ル所ハ
乙地ニ於テモ亦其月ノ計數ヲ取ラサリシナリ余
ハ此計數ニ由リ東京ニ於テハ五種ノ貸付金ニ對
スル平均利息一割二分ナルモ福岡ニ於テハ大一
割限利息ヲ超過スルヲ知レリ其割合ハ東京ニ在

テハ一割八分八釐ニシテ福岡ニ在テハ一割九分八釐トス尚ホ之ヲ細別スレハ左ノ如シ
 五千圓以上一萬圓未滿ノ貸付金平均利息表

各種平均	無抵當	雜物	米穀類	土地及家屋	公債證書	抵當物名	
						年	月
八十四ヶ月平均	同年同月ヨリ 千八百八十年六月ニ至	同年同月ヨリ 千八百七十九年七月ヨリ 同年四月ニ至	千八百八十年七月ヨリ 同年四月ニ至	同年同月ヨリ 同年五月ニ至	千八百七十九年七月ヨリ 千八百八十一年四月ニ至	東京	福岡
	一、一八	一、一九	一、二	一、一九	一割一七		一割八一
	一、一八	一、一九	二、二五	二、一六			
	一、一八	一、一九	二、二五	二、一六			

右ノ平均金利ヲ觀ルニ福岡ニ在テハ利息制限法

ノ全ク無効ニ屬セルヲ知ルヘシ又東京ニ於テ制限利息ノ最高額ヲ超過セサル所以ノモノハ利息制限法アルノ故ニ非スニテ專ラ各地ヨリ金錢ノ流入スルト貸付機關ノ良巧ナル者アルトニ因レルナリ

第六十九條

第三 利息制限法ノ無効ナルコトハ尚ホ左ノ事實ヲ以テ之ヲ詳ニセン農商務省商務局ノ商況年報第八第十六表ニ於テ五千圓以上一萬圓未滿ノ貸金ニ付明治十二年度及十三年度(千八百七十九年乃至八十年及千八百八十年乃至八十一年)中八ヶ所ノ商業地ニ於ケル七種ノ抵當物ニ係ル平均

利息ヲ掲ケタリ今其表ヲ見ルニ千三百四十四欄
 アリテ其七百十五欄ハ填記セリ此七百十五欄中
 九十五ハ制限内ニ在リテ六百十八ハ制限外ニ在リ
 其比例ハ百ト四百四十二ニ當レリ而シテ其制限
 内ニ在ルモノ、利息ハ九分乃至一割一分ニシテ
 制限外ニ在ルモノ、利息ハ一割二分乃至三割三
 分六厘トス
 又各種抵當物ニ對スル利息ノ割合ヲ觀ルニ最モ
 高利ナルモノハ土地及家屋ノ抵當ニシテ之ニ次クモ
 ノハ米及其他ノ穀類トス故ニ農夫ハ最モ高利ニ
 驅迫セラル、モノト謂フヘシ其割合左ノ如シ
 五千圓以上一萬圓未満ノ貸金ニ對スル平均利

子

抵當物	貸付度數		
	一割二分以下	一割二分	一割二分以上
公債證書	三五	三七	七三
土地及家屋	五	二〇	九五
地金銀	一七	一〇	二五
米穀類	八	二二	六七
生糸	一	二一	二四
雜物	一二	三五	九二
無抵當	一七	一六	七三
合計	九五	一六一	四四九

此各種抵當物ニ付一割二分以下ト一割二分以上
 トノ貸付度數ヲ比較セシニ其比較ノ便ヲ計リ假

第三類

土地及家屋

一〇〇

三八〇

第七十條

是ニ由テ之ヲ觀ルニ從來日本ノ貸借上ニ於テ土地及家屋ノ信用ナキコト知ルヘキナリ今其然ル所以ヲ尋究スルニ日本經濟上他ノ貸借ニ關シテハ商業上ノ如キハ乃十數多ノ銀行アリテ大ニ便利ヲ與フト雖モ土地家屋ニ至テハ更ニ適當ノ抵當貸付會社ナキヲ以テナリ

日本ノ貸借上ニ於テ利息制限法ノ無効ナル所以ハ以上掲クル三項ノ事實ニ於テ之ヲ詳ニスルヲ得シ故ニ夫ノ利息制限法ハ既ニ五圓以上一萬

圓未滿ノ貸金ニ於テ其効ナク又百圓以上ノ貸金ニ於テモ其効ナキモノトセハ安ソ百圓未滿ノ貸金ニ於テモ亦其効力ヲ有セサルコトナキヲ知ラシヤ故ニ年來農夫ノ制限利息ヲ超過スル不當ノ高利ニ驅迫セララル、ハ怪ムニ足ラサルナリ今余ハ近時ノ統計表ヲ得ルニ由ナシト雖モ各地借金黨ノ踵出スル所以ヲ察スレハ必シモ統計表ヲ待チテ而シテ後ニ知ラサルナリ

第七十一條

然ラハ則チ政府ハ現行ノ利息制限法ヲ用キテ農民ノ負擔ヲ輕カラシムル能ハサルカ抑モ今日ニ在リテ農民法廷ニ出テ、高利ノ訴ヲナスハ極メ

テ稀ナリトス是レ他ナシ高利ノ爲ニ漸次増加シ
 タル負債額ヲ減少センコトヲ求ムルノ訴訟ハ之
 ヲ起シ能ハサルニ非スト雖モ縱ヒ法廷ニ於テ其
 高利タルヲ證明スルモ其負債ハ猶ホ年一割五分
 若クハ二割ノ制限利息ヲ以テ繼續セサルヲ得ス
 又若シ其利息ヲ支拂ハサルトキハ之ヲ元金ニ加
 フルカ故ニ到底債主ノ酷遇ヲ脱スル能ハス加之
 若シ之ヲ訴フルニ於テハ忽チ債主ノ歡心ヲ失ヒ
 若シ一時ニ負債ノ全額ヲ辨償スル能ハサルトキ
 ハ常ニ資産ヲ擧ケテ之ヲ失フニ至ルノ患アルヲ
 免レサレハナリ故ニ今農夫ヲシテ負担ノ義務ヲ
 輕カラシムルノ策ニアリ

第一 農民ヲシテ制限外ノ高利ニ因リ増加シタ
 ル負債額ヲ減少スルニ容易ナラシムルコト

第二 農民ヲシテ其容易ニ減少シタル負債額ニ
 付債主トノ關係ヲ脱セシムルコト

第二項 農民ノ抵當負債ニ對スル義務ヲ解
 放スルノ策

第七十二條

字團ニ於スタイン及ハルゲンブルヒノ法律ヲ設
 ケタルヤ主トシテ土地ニ屬スル賦金及賦役並ニ農
 地ノ共同使用及領主ト人民トノ間ニ於ル一方又
 是雙方ノ義務ヲ解キ以テ農民社會ノ位置ヲ改良

スルニ在リシナリ而シテ割國政府ハ之カ爲メニ
非常ノ困難ヲ冒シテ整心其事ニ從ヒ二百萬以上
ノ農民ヲシテ過重ノ義務ヲ免カレシメタリ今日
本ニ在テモ亦同シク法律組織及行政上ノ處置ヲ
以テ農民ノ位置ヲ改良セサルヘカラス
索國ニ於テハ奴隸及永世隸屬ノ制ヨリ生シタル
臣屬ノ弊ヲ匡正シタリ今ヤ日本ニ在テハ近年地
租金納ノ法ヲ設ケタル爲ニ農民ノ起セシ所ノ負
債ヲ減少セシムヘキナリ農民ノ負債ニ困苦スル
ヤ近日ニ至リ紙幣ノ相場騰貴シタルカ爲メ前ニ
負債ヲナセシトキヨリ高價ナル通貨ヲ以テ其元
利ヲ辨償スルニ至レルカ故ニ益其慘狀ヲ極メタ

リ曩ニ日本政府ハ千八百七十年ニ於テ華士族ノ
永世祿ヲ廢シ金祿公債證書ヲ發行シテ全國人民
ノ利益ヲ計レリ然ラハ則チ今又全國ノ利益ヲ計
リ農民ノ債主ニ對シ亦宜シク同様ノ方法ヲ施行
スヘキナリクエス子イ言ヘルコトアリ曰ク民貧
ナレハ其國貧ニ國貧ナレハ其王亦貧ナリト余ハ
則チ將ニ曰ハントス民貧ナレハ則チ其國貧ニ國
貧ナレハ則チ其國亦隨テ弱シト

第七十三條

索國ニ於テ土地ノ義務ヲ解放セシヤ權利者義務
者ノ中間ニ在リテ其辨償方ノ媒介ヲナセシモノ
ハ土地義務解放銀行トス抑モ土地義務解放銀行

ナルモノハ政府ノ保證ヲ受ケテ土地義務解放債券ヲ發行シ以テ權理者タル債主ニ交付シ而シテ義務者タル農民ヨリハ國稅徵收ト同一ナル手續ヲ以テ各人元利償還ヲ畢ルマテ年々其利息高ヨリ多額ナル金員ヲ徵收ス又其債券ハ無記名トナシ農民ヨリ年賦徵收シタル金員ヲ積立テ漸次ニ抽籤シテ其償還ヲナセリ故ニ其手續ハ毫モ抵當證券ニ異ナルコトナシ

第七十四條

今日本農民ノ抵當負債ノ義務ヲ解放スルニハ學國ト同様ナル機關ヲ要スヘシ今學國ノ機關ヲ舉レハ左ノ如シ

第一各郡勸解廳 各郡勸解廳ハ權利者ト義務者トヲシテ和解セシムル所トス

第二各州委員廳 各州委員廳ハ勸解不調トナリタル事件ヲ裁判スル所ニシテ始審裁判所トナルモノトス

第三上等地方農事裁判所 上等地方農事裁判所ハ各州委員廳ノ裁判及命令ニ伏セサル者ノ控訴裁判ヲナス所トス

第四各州土地義務解放銀行 各州土地義務解放銀行ハ土地ニ屬スル義務ヲ解放シ且ツ從前ノ權利者ト義務者トノ關係ヲ解カシカ爲メ土地義務解放債券ヲ發行シテ權利者ニ交

付シ而シテ義務者ヨリハ勸解廳ノ裁判ニ從
ヒ年賦金ヲ取立ツル所トス

今日本ニ於テモ亦之ト同様ナル左ノ機關ヲ要ス
ヘシ

(備考)余ハ茲ニ字國土地義務解放條例ニ揭
ケタル文字ヲ用ウ然レトモ本論ニ所謂勸
解トハ常ニ抵當債主ト負債者トヲ勸解ス
ルヲ謂フナリ

第一 各郡毎ニ勸解廳一箇所ヲ設ケ抵當債主
ト負債者トノ間ニ爭論ヲ起シタルトキ双方
ノ請願ニ應シテ之ヲ中裁セシム而シテ其
取扱フヘキ事件ハ前文ニ掲ケタル日本利

息制限法ニ依リ其制限額超過ノ利息手数料
及違約金等ヲ扣除シ負債額ヲ確定スルコト
トス

第二 若シ抵當債主ト負債者トノ間ニ於テ勸
解不調トナリタルトキハ其府縣ノ委員廳ニ
出願シテ裁決ヲ請ハシムヘシ

委員廳ニ出願シタル勸解事件ハ特別委員ヲ
シテ其場所ニ就テ審問セシムルヲ例トス
右ニ付特別委員ノ心得方左ノ如シ

(イ)勸解ニ必用ナル事實及狀況ヲ取調フル
コト
(ロ)成規ニ從ヒテ委員廳ノ權限内ニ屬スル

事件ヲ取調ヘ裁決ノ手續ヲナスコト

(ハ)然レトモ勸解事件ハ務メテ之ヲ和解セシムルコトヲ要ス故ニ審案ノ上原被兩造ノ事情ヲ斟酌シテ相當ノ勸告ヲナシ以テ公平ノ調和ヲ致サシムヘシ

(ニ)必要ノ場合ニ於テハ委員廳ノ認可ヲ得テ勸解處分ヲ實行スルコト

一タヒ開キタル勸解裁判ハ必ス之ヲ繼續シ止ヲ得サル事情アルカ又ハ止ヲ得サル差支アルニ非サレハ決シテ其審問ヲ延スコトヲ許サス原被兩造ハ召喚狀ニ記載シタル期中ハ勿論其期日後ト雖モ委員ヨリ裁判閉廷

ノ申渡アルマテハ必ス自身ニ出廷スヘシ

第三 日本ニ在リテハ委員ノ判決命令ニ對スル控訴廳トシテ全國ニ一ヶ所ノ上等農事裁判所ヲ開設スルヨリハ各府縣ノ委員廳ヲ以テ控訴裁判所トナスヲ適當トス而シテ之ヲシテ控訴裁判所タラシメンニハ委員ヲ增置シ控訴事件ニ付テハ總員列席裁判(其府縣廳ノ所在地ニ於テ)ヲ開キ終審裁判ヲナサシムヘシ

第四 日本ニ在リテハ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲシテ土地義務解放銀行ノ業務ヲ營マシムヘシ

第七十五條

余ハ今府縣貯金兼土地抵當貸付會社ニテ其業務ヲ執ル場合ニ於テ貸付金額ニ種々ノ差ヲ設クヘキ所以ヲ説ク抑モ貸付會社ハ其通常貸付金ニ於テハ貸付制限(例ヘハ土地ハ地券面ノ半額ヲ以テ制限トスルカ如シ)ヲ定ムヘキモノトス而シテ抵當證券(土地義務解放債券)ヲ以テ權理者ニ交付スヘキ金額及其金額ニ應シ會社ノ受取ルヘキ抵當物ハ父シモ制限以内ノモノノミニ非ス故ニ今勸解ニ依リ調和確定シタル金額ニシテ會社ノ制限内ニ在ルトキハ會社ハ前債主ニ代リテ其金額ヲ貸付ケ曾テ危險ノ恐ナカルヘシト雖モ若シ制限

額ヲ超過スルモノアルトキハ其超過ノ分ニ對シテ會社自ラ危險ニ當リ其債主トナルコト能ハサルヘク縣廳ニ於テモ期限ヲ違ヘスシテ元利ヲ償却スヘキノ保證ヲナスコト能ハサルヘシ然ラハ則チ之ヲ如何セン其方法他ナシ制限額ヲ超過シタル貸付金ハ其超過額ヲ以テ第二抵當ニ對スル貸付金ト爲シ而シテ此貸付金(例ヘハ土地ハ地券面ノ半額以上三分ノ二マテノ間トスルカ如シ)ニ付テハ第二抵當證券ヲ發行スヘシ此第二抵當證券ニハ一定ノ利率ヲ設ケスシテ年々負債者ヨリ實際收入シタル利息ニ應シ拂渡スコトヲ得ヘキ金額ヲ配付スヘシ故ニ其不足ノ分ハ前債主ノ損

失トシ以テ當初抵當物件ノ價額ヲ確認セスシテ
漫ニ價額ニ相當セサル金員ヲ貸付ケタルノ咎責
トス而シテ負債主ノ年賦償還シタル元金ハ半年
毎ニ抽籤ヲ以テ證券ノ償却ニ充テ若シ第二抵當
ノ年賦償還金ニシテ負債者之ヲ支拂ハサルモノ
アルトキハ證券償却期限ヲ延スハシ故ニ此第二
抵當證券ノ償却期限ハ決シテ確定シタルモノニ
非ス若干ノ負債者ニシテ償還義務ヲ欠キ爲ニ第
二抵當證券ノ償却期限ヲ延期シタルトキハ其他
ノ第二抵當負債者ノ償還期限モ亦之ニ準シテ延
スヘキナリ
又地價三分ノ二ヲ超過スル貸付金ハ其超過額ヲ

以テ(例ヘハ其金額抵當物價ノ三分ノ二以上五分
ノ四以下ニ於ケルカ如シ)第三抵當ニ對スル貸付
金トナシ以テ第三抵當證券ヲ發行スヘシ是ノ如
クスレハ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ニ於テハ
第二及第三抵當證券ヲ管理スルニ多額ノ經費ヲ
要セスシテ且ツ自ラ危險ヲ踐マサルヘキナリ

第七十六條

以上舉クル所ノ機關ヲ構成スルニハ殊ニ其困難
ヲ見サルヘシ今試ニ左ニ之ヲ掲ケン

- 一 各郡勸解廳ニハ郡長ヲ以テ長トシ其郡
ノ府縣會議員ヲ以テ勸解員トナス
- 二 府縣委員廳ニハ委員五名ヲ置キ一名ハ

其府縣ノ書記官ヲ以テ之ニ充テ内務卿
之ヲ命ス又二名ハ府縣會之ヲ撰任シ他
ノ二名ハ裁判官ノ中ヨリ司法卿之ヲ命
ス委員ハ委員中ヨリ委員長一名ヲ推撰
ス
三 府縣委員廳ヲ以テ控訴裁判所トナスニ
ハ更ニ委員四名ヲ加ヘ其内二名ハ府縣
會之ヲ撰任シ二名ハ裁判官中ヨリ司法
卿之ヲ命ス委員ハ九名中ヨリ委員長一
名ヲ推撰ス
四 府縣貯金兼土地抵當貸付會社ハ第二及
第三抵當證券ヲ管理スルノ組織ト爲ス

ヘシ

五 府縣貯金兼土地抵當貸付會社ハ各郡ニ
代理店一個所ヲ設ケ勸解濟ノ上其負債
者ノ收獲保險家畜保險及家屋保險ヲ受
クルトキハ之カ爲メ必要ナル評價ヲ爲
シ又其農民貯金組合ニ加入スルトキハ
成規ニ依リテ其事ニ關與スヘシ

第七十七條

抵當負債ノ義務解放ニ關スル費用ハ勸解ニ係ル
モノハ原被兩造ヲシテ負擔セシメ保險ニ係ルモ
ノハ負債者ヲシテ負擔セシム若シ勸解裁判ノト
キ負債者ニ於テ債主ノ制限利息ヲ超過シ又ハ不

當分禮金ヲ取リタル證憑ヲ供出スルカ若クハ其
他信憑スヘキ方法ヲ以テ之ヲ證明スルトキハ其
費用ノ大半又ハ全額ヲ債主タル高利貸人ニ負擔
セシムヘシ
費用ノ算定法ニハ掛員ノ日常旅費規則ヲ定ムヘ
シ而シテ政府ハ勸解費用ヲ減少セシメンカ爲メ
裁判手数料印紙税及郵便税ヲ免除スヘシ
勸解廳ノ組織及執務ニ必要ナル規定ハ以上掲ク
ル所ヲ以テ充テナルヘシ

第七十八條

前文ニ開陳シタル農民ノ負債償却方及農民負擔
減輕法ノ利益ハ政府ヲシテ之ニ關スル法律規則

ヲ發布シ且ツ諸機關ヲ構成スルノ勞ヲ取テシム
ルモ尚ホ之ヲ償フニ餘リアルヘシ而シテ府縣貯
金兼土地抵當貸付會社ノ抵當證券發行所ヨリ發
行スル抵當證券第二及第三抵當證券ノ利益ハ政
府及地方ノ財務ニハ著シキ影響ヲ及サ、ルヘシ
又農業上ニ於テ負債ナキ人民ヲシテ損害ヲ蒙ラ
シムルノ憂ナクシテ農民ノ爲ニ莫大ナル巨額ノ
資本ヲ備フルヲ得ヘシ而シテ夫ノ無耻ナル無數
ノ高利貸人ノ或ハ免カレ或ハ犯セシ所ノ法律即
チ從來死文タル利息制限法モ今余ノ計畫スル所
ノ方案ヲ用ウルトキハ自ラ實際ニ用キラレテ農
民社會ノ疾苦困弊ヲ救濟シ大ニ政府ノ光榮威權

ト立法者ノ信用トヲ増加セシムルヲ得ヘシ
夫レ負債者ニ利益スル所ハ主トシテ抵當證券ニ
附スル利息ノ高低如何ニ由レリ然レトモ其利息
ヲ定ムルハ債主ノ資本ヲ減縮セシメサランカ爲
メ證券ヲシテ呼價ト大差ナキ相場ヲ得セシムル
ヲ要ス抑モ方今(千八百八十六年二月)六朱利附ノ
金祿公債證書及起業公債證書ノ相場ハ百圓五十
錢ニシテ金札引換公債證書ノ相場ハ百圓トス故
ニ今日ニ在リテハ年六朱ノ利息ニテ充ルナルハ
シ何ヲ以テカ之ヲ言フ請フ試ニ之ヲ説ク伊豆國
ノ借金黨嘗テ債主ニ迫リ利息ヲ低減シテ一割三
分トナセシ事アリ然レトモ資本家ハ他日借用申

込人アルトキニ及ビ能ク此一割三分ノ利息ヲ以
テ貸付ヲ承諾スヘキヤ否ヤ恐ラクハ之ヲ承諾セ
サルヘシ又農民ト雖モ非常ノ困弊ニ陥ルトキハ
前ニ債主ニ迫リテ利息ヲ引下ケシメタルトモ亦
猶ホ手数料ヲ前引セラルヘキカ故ニ彼ノ一割三
分以上ノ利息ヲ拂ハサルヘカラサルニ至ルヘキ
ナリ)其利息ノ高キコト以テ見ルヘキナリ其他ハ
大商業地ノ統計表ニ據ルニ日本銀行ニ於テハ金
錢ヲ融通シテ商業上ノ利息ヲ均一ナラシムル能
ハスシテ五千圓以上一萬圓以下ノ巨額ノ貸借上
ニ於テスヲ制限利息ヲ超過シタルコトアリ又現
今日本ニ一モ完備ノ方法ヲ以テ農業上ニ資金ヲ

融通スル土地抵當貸付會社アルコトナシ又方今
日本農民ノ疲弊ト徃徃不平ノ舉動アル所以トヲ
察スレハ從來負債者タル農民ヨリ債主ニ支拂ヒ
タル利息ハ平均百圓以上千圓以下ニ對スル制限
ヲ超エ一割五分以上ノ利息ヲ拂ヒ來リタル事ヲ
知ルヘシ其他明治十四年日本全國ニ於ケル土地
及家屋ノ抵當高總計ハ實ニ一億四千百萬圓トス
之ヲ算勘スルニ其中五分ノ三乃至五分ノ四以上
ハ鄉村ニシテ殊ニ耕地及農民家屋ノ抵當ニ係レ
リ明治十四年以來今日ニ至ルマテ已ニ滿四ヶ年
ヲ經過シ而シテ抵當負債ハ年々著シク其員數ヲ
増スノ傾向アリ則チ現今農民ノ土地家屋抵當負

債ノ金高ハ一億五千萬圓以上ニ昇レリト云フモ
敢テ証言ニ非サルヘシ今若シ果シテ余ノ計畫ス
ル所ノ方案ヲ實行シテ此一億五千萬圓ニ對シ年
々平均一割五分ノ利息ヲ附セスシテ年六分ノ利
息ヲ附スルモノトセハ其差ハ則チ九分ニシテ之
ヲ金額ニ換算セハ年々凡ソ千三百五十萬圓トス是
レ正ニ全國地租ノ三分一ニ當レリ農民ノ負擔ヲ
輕減スル亦大ナリト謂フヘシ試ニ思ヘ曾テ地租
五分ノ一即チ八百萬圓ヲ輕減シタルコトアリシ
ニ全國ノ民其恩澤ノ厚渥ナルヲ感激稱揚シタル
コト果シテ幾何ナリシソ又當時各地方ニ於ケル
農民ノ一揆ヲ鎮定スルノ力ヲ幫助セシコト果シ

幾何ナリシヲ然ルニ今ヤ國庫ノ支出ヲ要セス
シテ此ノ如キ好結果ヲ得ハ豈之ヲ美舉ト謂ハサ
ルヘケンヤ

又余ノ方案ニ依ルトキハ其利益獨リ此一事ニ止
マラス其最も大ナルモノハ通常一個年若クハ二
三今年間ニ限レル短期貸付法ヲ廢シ負債ノ額ヲ
十數年ニ分割シテ便宜償還スルヲ得ヘキ長期貸
付法ヲ設クル是ナリ而シテ此貸付法ニ於ケルヤ
債主タルモノハ所謂高利債主ニ非スシテ各地方
人民ノ福利ヲ増進スルノ目的ヲ以テ設立シタル
所ノ公立銀行ナリ此銀行ハ農民ニ對シ貸付ヲナ
スニ必須ナル要件(例ヘハ種種ノ不幸變災ノ保險

ヲ受ケシムルコト等)ヲ求ムルト雖モ亦保險又ハ
貯金ノ方法ヲ以テ其急ヲ救フコトヲ得サル大凶
荒ノ年ニ當リ又ハ農民ノ惡意怠慢等ニ因テサル
不幸災厄ノ場合ニ當リテ貸付ヲナシテ以テ其急
ヲ救フモノナリ蓋シ銀行ハ自ラ損失ノ危險ニ當
リテ貸付ヲナスヘキ土地及家屋ニ對シ適宜ノ貸
付額ヲ限定スルカ故ニ二三年間以上期限ヲ違
ヘスシテ年賦償還金ヲ支拂ヒタル農民ニハ再ヒ
其不幸災禍ニ遭逢スルニ當リ更ニ此拂込金額ヲ
貸付クルコトヲ得ヘシ而シテ此銀行ハ固トヨリ公
利公益ヲ増進センカタメ設立シタルモノナルカ
故ニ夫ノ高利債主ノ如ク負債者ノ疾苦ヲ好機ト

シテ不當ノ利益ヲ貪ルカ如キコトナキモノナリ
第七十九條

又余ノ方策ニ依ルトキハ負債者ニハ非常ノ利益
アリテ而シテ債主ニハ之ニ準スル巨大ノ損失ナ
カルヘシ何トナレハ債主ハ農民ヲ束縛シテ常ニ
高利ヲ拂ハシムルノ權利ナケレハナリ若シ債主
縱ニ當初貸借契約ノ時ニ於テ契約期限以内ハ負
債者ノ都合ニ依リ負債額ヲ辨償スルコトヲ禁シ
タルコトアリトスルモ一旦元金ノ償還ヲ受ケタ
ルトキハ其債主タルノ權利ハ已ニ消滅スルモノ
ナリ況ンヤ此ノ如キ約定ハ極メテ罕ナルニ於テ
ヲヤ既ニ元金ノ償還ヲ受ケレハ則チ債主ハ已ニ

債主ニ非サルナリ蓋シ余ノ方策ニ依ルトキハ債
主ニ償還スルニ現金ヲ以テセシテ抵當證券ヲ
以テスト雖モ其證券タル無記名ナルヲ以テ現金
ヲ望ムトキハ隨時之ヲ取引所ニ出シテ賣却スル
ヲ得ヘシ夫レ政府ハ債主ヲシテ不當ノ利息ヲ負
債者ヨリ攫取スルヲ得セシムヘキ極メテ不完全
ナル民間ノ經濟ヲ維持保續スルノ義務ナキコト
明ケシ而シテ資本家モ亦決シテ永久ニ至ルマテ
今日ノ如キ高利ヲ農家ヨリ攫取スルヲ得サルモ
ノナリ抑モ政府ノ嘗テ華士族ノ永世祿ヲ廢シテ
公債證券ヲ發行マシヤ其後數年ノ間ハ該證券ノ
相場遙ニ呼價額ヨリ低廉ニシテ其利息ノ如キモ

亦舊家祿高ニ及ハサリシト雖モ政府ハ猶ホ斷然
之ヲ決行セリ然ラハ則チ今後假令全國ノ利率大
ニ騰貴シテ六朱利附公債證書ノ相場低落シテ額
面以下ニ至ルコトアリトスルモ政府ハ農民及全
國人民ノ福利ヲ増進スルノ條規ヲ斷行シ得サル
ノ理アラシキ蓋シ民間經濟上ニ於テ貸付方法完
備スルニ至ラハ此ノ如キ利率ノ騰貴ハ其跡ヲ絶
ツニ至ルヤ必セリ之ヲ要スルニ農民ノ現在抵當
負債ヲ償却セシカ爲メ抵當證券ヲ發行スルトキ
ハ多數ノ抵當證券所有主同時ニ其證券ヲ取引所
ニ賣却シテ現金ニ換ユルコトアルヘキカ故ニ一
時利息ノ騰貴即チ證券相場ノ下落ヲ來スヘシ何

トナレハ供給多ケレハ隨テ物價ニ下落ヲ來スハ
自然ノ勢ナレハナリ然レモ余已ニ前文ニ陳ヘタ
ルカ如ク此下落ハ但一時ノ事ニシテ敢テ介意ス
ヘキモノニ非サルナリ而シテ其證券ノ所有主ク
ル舊債主ハ之カ爲メ或ハ損失ヲ蒙リ必ス不平ヲ
鳴スヘシト雖モ余ハ此不平ニ對シ答辯ヲナスヘ
キモノニアリ一ニ曰ク債主ハ其貸金ニ對シ必ス
返還ヲ得ヘキノ目途ナカリシコトニ曰ク債主
ハ下落ノ紙幣ヲ貸付ケ騰貴ノ紙幣ヲ以テ償還ヲ
受ケタルヲ以テ異常ノ利益ヲ收メタルコト是レ
ナリ

第八十條

又前文ニ記載シタル方案ニ從ヒ負債者破産ヲナ
シ利息ヲ支拂ハサル場合ニ當リ六朱以下ノ利息
ヲ拂フヘキ第二及第三抵當證券ノ事ニ付キ尚ホ
一言スヘキモノアリ何ソヤ此場合ニ於テハ從來
其債主ノ各自ニ蒙ルヘキ損失ヲ今ハ其債主總員
ニ分割シテ負擔セシムルコト是レナリ然レトモ
此破産シタル負債者ノ年賦償還スヘキ元金額ハ
負債者總員ノ償還年限ヲ増シテ之ヲ分擔セシム
ルモノトス是レ第二及第三抵當證券ノ所有主ニ
對シテ完償ヲ與フルノ確證ト謂フヘシ故ニ余ノ
方案ハ債主負債者ニ對シテ毫モ偏頗ナク負債者
利息ヲ拂ハサルトキハ各債主ヲシテ其損失ヲ負

擔セシメ又元金ニ付テハ各負債者ヲシテ確實ニ
其義務ヲ盡サシムルモノナリ但シ此損失ニ關シ
テハ他ノ分擔法ヲ用ウルヲ得ヘシ例ハハ利息又
ハ元金ノ損失ハ其一半ヲ各債主ニ負擔セシメ他
ノ一半ヲ負債者ニ負擔セシムルカ如キ是レナリ

第三編 本案實行順序

一覽表

第八十一條

前編ノ意見書ニハ互ニ連絡ヲ通シテ一機關ヲ構成スヘキ諸般ノ組織及會社ノ事ヲ記述セリ今之ヲ大別シテ四種トナス左ノ如シ

第一種 保險法

收穫保險

家畜保險

家屋保險

第二種

貯金法

驛遞町村貯金預所

農民貯金組合

府縣貯金兼土地抵當貸付會社

第三種

貸付法

抵當證券ヲ發行スル府縣貯金兼土地抵當貸付會社

第四種

農民ヲシテ勸解廳ノ保護ヲ以テ債主ノ酷遇ヲ脱セシムル法

各郡勸解廳

府縣委員廳

控訴裁判所タル府縣委員廳

漸次設置ノ方案

第八十二條

第一期

一時東京驛遞局貯金預所ヲ中央貯金預所トナシ各地方ニ數多ノ驛遞町村貯金預所ヲ設置スル事

第二期

各府縣ニ於テ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲ設立スル事

東京驛遞局貯金預所ニ於テ町村貯金預所預人ノ貯金ヲ取集メ之ヲ各府縣貯金兼土地抵當貸付會社ニ輸送スル事
府縣貯金兼土地抵當貸付會社ニ於テ適宜ニ土地ノ價額ヲ見積リ之ヲ第一抵當トシ

第三期

其半額以内ノ金額ヲ貸付スル事
 聯合收穫保險、家畜保險、家屋保險會社及農
 民貯金組合ヲ設置スルトキハ、抵當負債者
 ヲシテ之ニ加入スルノ義務ヲ負ハシムル
 事
 數多ノ府縣ニ於テ貯金兼土地抵當貸付會
 社ヲ設立シタルトキハ直ニ抵當證券及中
 央抵當證券ヲ發行スル事
 中央抵當證券ニ關スル事務ヲ掌理セシメ
 シカ爲メ中央抵當證券發行所ヲ設立スル
 事

第四期

農民貯金組合ヲ設立スル事
 聯合收穫保險ノ制ヲ定ムル事
 各府縣被保險人組合ヲ設立スル事
 各府縣保險組合ノ聯合保險ヲナサンカ爲
 メ帝國保險組合ヲ設立スル事
 府縣貯金兼土地抵當貸付會社ヲ其府縣ノ
 中央保險會社代理店トナシ各郡ニ取次人
 一名ヲ置ク事
 中央抵當證券發行所ヲ中央保險會社トナ
 シムル事
 保險金算定法ニ依リ各被保險人ノ納付ス

ヘキ保險料ノ標準ハ收穫ヲ保險シタル土地ノ地價ヲ用ウル事
地價ニ依リテ割合ヲ設ケ各被保險人へ保險金ヲ交付スル標準ヲ定ムル事

第五期

勸解廳即チ各郡勸解廳府縣委員廳及控訴裁判所タル府縣委員廳ヲ設立スル事
抵當債主及負債者ノ勸解裁判ヲナス事及
抵當證券第二及第三抵當證券ヲ發行シテ
抵當債主ノ權利ヲ解ク事
地方抵當負債者ヲ府縣貯金兼土地抵當貸付會社ノ負債者ト爲シテ同時ニ收穫保險

組合ニ加入セシメ又家畜保險、家屋保險會社及農民貯金組合ヲ設立シタルトキハ直ニ之ニ加入スルノ義務ヲ負ハシムル事尤モ負債者ノ居住地又ハ居住ノ郡内ニ於テ已ニ農民貯金組合ノ設ケアルトキハ勸解處分濟貸付會社ヨリ貸付ヲ受ケタル後直ニ該組合ニ加入セシムヘシ
一區域内ニ於ケル被保險人ノ員數増加スルニ從ヒ漸次ニ(本期又ハ後期)各郡保險組合ヲ設立シ府縣保險組合ヲシテ聯合保險ヲ爲サシムル事
被保險人ノ員數益々増加スルニ從ヒ漸次

加
ニ(本期又ハ後期)町村保險組合ヲ設立シ各
郡保險組合ヲシテ聯合保險ヲ爲サシムル
事

第六期

收穫保險ト同様ナル組合ヲ設ケテ聯合家
屋保險法ヲ設定スル事

貸付會社ノ負債者ヲシテ家屋保險會社ニ

加入セシムル事

第七期

收穫保險及家屋保險ト同様ナル組合ヲ設

ケテ聯合家畜保險法ヲ設定スル事

貸付會社ノ負債者ヲシテ家畜保險會社ニ

加入セシムル事

第八期

貸付會社ノ負債者ニ非ル者ヲモ收穫保險

家屋保險及家畜保險並ニ農民貯金組合ニ

加入セシムル事但シ諸種ノ保險及貯金組

合ニ加入スルモ又ハ其中ノ一種ニ加入ス

ルモ渾テ本人ノ隨意トシ且ツ隨意ニ入社

スルコトヲ許スヘシ

必要ノ時日

第八十三條

余カ今前文ニ掲ケタル諸會社等設立ニ必要ナル

時日ヲ見積ルトキハ概ネ左ノ如シ

第一期	一个月乃至三个月
第二期	一个月乃至十二个月
第三期	三个月乃至六个月
第四期	十二个月乃至二十四个月
第五期	十二个月乃至二十四个月
第六期	六个月乃至十二个月
第七期	十二个月乃至二十四个月
第八期	十二个月
之ヲ總計スレハ	則チ五年十个月乃至九年九个月ニシテ其大數ヲ擧クレハ則チ六ヶ年乃至十年ヲ要スヘキモノトス

